僕と彼女と見えない何か

都籠 夕生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と彼女と見えない何か

【Ｎコード】

Ｎ１２２１ＢＡ

【作者名】

都籠　夕生

【あらすじ】

普通の人とは少し違う少年少女と見えない何かとのほのぼのストーリーです。

始まり　～お彼岸はやっぱり～（前書き）

初めての投稿で乱文ではあると思いますが、生暖かく見守ってください。

あらすじにもありましたがほのぼの重視でいきたいと思います。

始まり　～お彼岸はやっぱり～

ある日の午後、時間で言うと４時ぐらい。
その男はブロック塀に向かってしゃべっていた。
「だからなんで今なんだよ！、今４月だぞ？！」
「うるさい！ワシは今食べたいのだ！！」
よく見てみるとその男は制服を着ていた。
例によって高校生だろう。
この近くにある敷島高校（しきしまこうこう）という高等学校のものだ。
その少年が誰もいない空間に向かって怒鳴っている。
傍から見ると近所の子供に罵られても仕方ないと思える光景だ。
言うが早く早速近所の子供達が彼を囲み、
「お前何一人で騒いでるんだ～」
「こいつおかしいんじゃねー」
などと口々に彼に雑言を投げかける。
「お前らうるせぇ！！」
この喧噪に聞き飽きたのかその高校生が一喝した。
「とりあえずガキ共！！、お前らもう帰れ！！！」
「一人で何かしゃべってる奴にいわれたくないよね～」
「だよなぁ～」
今までの彼の醜態を見ていた少年たちは全く聞く耳を持たず、挙句に
「そんなことどうでもいーから、はよーおはぎ買って奉るのじゃ！！」
「あぁ！もう！！お前らなぁ…」
彼の額には僅かに青筋が、背後には薄青いオーラのようなものがほとばしっている。
実際彼はよく耐えたほうなのだ。
常人ならばもうとっくに堪忍袋なるものの緒が切れている。

それが彼の器の大きさを物語っている……のだろう。
しかしそんな彼もイライラが臨界を超えようとしたその時、
「ちょっとまったぁーー！！」
遠くから少女の声が聞こえてきた。
「あやの？！」
その存在にいち早く気づいた彼はその少女に　ーあやのに声をかけた。
「お、お前どうしてここにいるんだ？？先に帰ったはずじゃ…」
「桐哉の声がでかいのよ！！近所迷惑を考えるってものがもありゃしないんだから！！！」彼　ー桐哉（きりや）にまくし立てたいのはやまやまなあやのだったが冷静に状況を判断したのか、
「僕たち～そこのお兄ちゃん頭ちょっとおかしいからもう構うのやめてあげて？？あとはお姉ちゃんがなんとかしとくから♪」
子供達を懐柔しにかかった。
「おねーちゃんだれー？」
子供達を懐柔しにかかった。
「おねーちゃんだれー？」
「おねーちゃんこいつの知り合い？」
「お姉ちゃんこいつのコレ？」
ゴン！！　正義の鉄拳が粛清に動いた。
痛そうに。
「とりあえず、あんた達さっさと帰りなさい！」
「あのな～あやのこいつらが言って聞くようなっ…ておい！」
「あいつらもういねぇじゃねえか……」
「まっそうゆうこと♪」
「次はこっちね。」
あやのは早々に本題に入った。
何故桐哉が大声をあげていたのか。

始まり　～お彼岸はやっぱり～（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。読みにくかったと思いますが一応連載となっているので随時更新していきたいと思います。

続きです。

「嬢ちゃんもワシが見えるのか？」
空間が音を発した。
「んーなんとなく気配があるって感じかな？ごめんねちゃんとは見えないの。一応声は聞こえるけど…」
「ワシの声が聞けるのなら話は早い、嬢ちゃんワシにおはぎをくれんかね？」
「この堅物はいかん。何がおはぎはお彼岸じゃ　お彼岸でなくても食べたいものは食べたいのじゃ！」
「おいおい…ひどいいわれようだな」
恐らく一彼らは目に見えない何かとしゃべっているようだ。
「とりあえず嬢ちゃん、おはぎを！」
「うん。わかったわちょっと待っててね？桐哉！ちゃんと待ってなさいよ！！」
と言い残しあやのは走っていってしまった。
「またおぬしと二人か…ワシは婆さんにあいたい。」
「ならとっとと成仏しやがれ」
「おぬしは冷たいのぉ。そんなことよりなんだ、あの嬢ちゃん結構かわいいじゃないか、婆さんの若いころにそっくりだ。ちゃんと捕まえて置くんだぞ？少年。」
「あーはいはい。」
彼は上の空で見えない何かの話を聞いていた。見えない何かの程なくしてあやのが手にビニール袋を引っ掛け走ってきた。
「ごめんねー遅くなって。今時おはぎなんてそんなにないもんで。」
すると彼女はおはぎが四つ入ったタッパーを取り出した。
それをみた彼は、「なんだあやの、お前一緒にも食べるつもりで買ったのか一？」と
ドカッ。正義の鉄拳が彼の頭に降り立つ。

そのまま　ふしゅーと音を立て、彼はほどなくして意識を失った。
「嬢ちゃん、ホントに婆さんの若い頃にそっくりやなぁ～。」
「もう！本当にコイツ失礼にも程があるわ！！」

続き

「そんなやつはどうでもいいから嬢ちゃん、早くおはぎを！！」
「あ、ごめんね。」
「これどうしたほうがいい？おはぎに箸さす？」
「そうしてくれるとありがたいなぁ、ここの、そうそこじゃ、そこにおいてくれ。」
あやのはおはぎを一個取り出し、どこからとりだしたのか小皿にのせ、見えない何かの指定する位置におはぎを　供えた。
「おじいちゃんどうしたの？」
「うむ、ワシもよく覚えていないのじゃがただおはぎが食べたくてのぉ、うろうろしとったらそこの少年に話しかれられたのじゃ。うむ、このおはぎは……あのかものはし屋のモンじゃろ？」
「おじいちゃんよくわかったね！そうだよ、かもはしのおはぎだよ！！」
「なぜかおはぎのことだけはよく覚えとっての～。　生きちょった時はよく食べたモンや」
「そう…これでよかった？」
「そうじゃな。ありがとうよ、お嬢ちゃん。」
「えへへ。」
こんなたわいもない会話は桐哉が目覚めるまで続いた……。
「そろそろじゃのう。」
見えない何かーおじいさんの体がだんだん薄くなって行く。
「もうコイツも起きるじゃろ。よほどさっきの嬢ちゃんの一発が効いたんじゃな。」
「ちょっとやりすぎちゃったけどね。」
あやのは少し悪びれた様子で呟いた。
「まあほどほどにしとくんじゃぞ？コイツは悪いヤツではないでの。」

「はーい。」　あやのは少し照れながら会話を切った。
その間にもおじいさんの体はどんどん透けていく。
あやの自身も気配がなくなっていくのをしっかり感じていた。
「達者でな。おはぎのことはありがとよ。」
「どう致しまして。」
「それでは。」

そう言い残して、おじいさんは消えた。

「逝ったか。」
いつのまにか気絶から復帰した桐哉がそう呟いた。
「うん…。」

しばしの沈黙。
その均衡を破ったのは桐哉であった。
「おいあやの、お前おはぎ三つも食べたのか??もう6時だぞ?今から晩飯じゃ……。」
その言葉の先を聞くよりもあやのの拳のほうが早く動いていた。
「これがなければなぁ…。」

今日も何事もなく、平和でした。

続き（後書き）

なんとか一区切り行けました。（汗）

ここまで読んでいただいて本当にありがとうございました。（二回目）

次話は、またあくる日の出来事を書きたいと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1221ba/

僕と彼女と見えない何か

2012年1月3日00時54分発行